

平成16年4月28日

平成16年度「教育研究支援プロジェクト経費」成果報告書

プロジェクトチームの代表者

部・講座等名 障害児教育

氏名 星山麻木・高原光恵

プロジェクトの名称	音楽療法とムーブメント療法を適用した特別支援教育における指導者の専門性向上のための支援教育プログラムの開発	配分 予算額	円 350,000	年次計画 16
プロジェクトの概要	<p>障害児教育は特別支援教育への大きな転換期を迎えている。今後、特別支援教育について、それぞれの地域が支援システムを再構築しなければならないが、指導者の専門性向上については、多くの課題が残されている。養護学校教員の免許取得率は、約50%程度である。教員免許を取得した後も自己研鑽を続け、専門的な支援のための資質を向上させていく努力が求められるが、免許取得後、専門的な力量を向上させるためのスーパーバイザー制度がないため、専門的な技量の維持と向上のシステムが構築されているとは考えがたい。</p> <p>今後、障害特性や程度が異なる様々な子どもたちや保護者のニーズに応えるには、複数の教育的方略を即興的に、柔軟に応用し、子どもたちひとりひとりに適応させる指導能力が求められる。</p> <p>教育は知識偏重から創造性豊かな人材づくりへとシフトしなければならないと指摘されているが、教員も全く同様の課題を抱えていると考えられる。学校教育ではいまだ知識偏重の教育を受けた教師が多く、1つの授業、1つの課題を、自らが考え、表現し、即興的に魅力ある授業を創る能力が未熟である。しかしながら、多くの指導者が苦手とする即興力や自己表現の向上を促すための教育プログラムは見当たらない。</p> <p>そこで、本研究では鳴門教育大学附属養護学校教員および院生を対象に音楽療法とムーブメント療法を適用し、特別支援教育における指導者の専門性向上のための支援教育プログラムの開発を目的として、指導者のためのプログラム試作を行った。</p> <p>指導者のためのプログラムと指導のねらいにしたがって、プログラムを実施し、その前後においてアンケートを行い、自己評価を行った。その結果、院生、教員ともにプログラム実施前よりプログラム実施後に自己評価が高くなった。また年齢が高い対象者ほど、教育プログラムの効果が得られやすかった。総じて、教育プログラムを行うことは指導者の自信を養い、自己を客観的に評価する能力など、自己の向上に効果が得られると考えられた。</p>			
成果の概要	<p>特別支援教育における指導者の専門性向上のための支援教育プログラムの開発を目的として、音楽療法とムーブメント療法を適用した、指導者のための教育プログラムを附属養護学校教員13名、院生17名にそれぞれ実施した。その際、プログラムの前後に、「即興力」、「表現力」など様々な指導能力、専門性に関する自己評価アンケートを行った。</p> <p>その結果、以下のことが示された。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 教育プログラムが自己評価に与えた効果について <p>ほとんどの項目においてプログラム実施前より実施後の方が自己評価は高まり、院生、教員ともに、教育プログラムの効果が認められた。</p> <p>また、一部の項目では、プログラムの効果は教員群に顕著に現れることが示された。</p> <p>なお、「子どもの受容」に関する項目では、教員よりも院生の方が自信を持っていることが示された。この項目は、院生が最も高い評価点を出した項目であった。</p> 2) 自己評価の平均変化量と年齢との相関について <p>プログラム前後の自己評価変化量と年齢との間には、有意な相関が認められ、年齢が高いほど、教育プログラムの実施を自己評価の向上に結びつけやすいことが示唆された。</p> 3) 自己評価が低下した項目について <p>教員では全項目において得点が上昇していたが、院生では「即興力」に関する項目で自己評価が低下していた。このことは、プログラムの実施により「表現力の向上やリーダーシップのとりかた、子どもを楽しませる工夫」など、様々な点でヒントが得られ、自信をつけていく場合とは異なり、特に経験の浅い院生にとっては改めて「即興力を身につけること」の難しさに気づかされた結果と思われる。</p> <p>さらに、教員の意見・感想から、自己評価での気づき、他者の表現や対応からの学び、非言語的コミュニケーションの豊かさへの気づき、継続した受講の希望や研修会への利用提案など、教育プログラムに対する数多くの肯定的な意見が寄せられた。</p> <p>上記のことから、今回試作した教育プログラムの有効性および指導者の専門性向上のための支援教育プログラムの重要性・必要性が明らかとなった。</p> 			

